第5章　付　　篇

1　中央図書館増築予定地M－16区におけるPlant Opal分析

宮崎大学農学部　藤原　宏志

1　分析試料

試料採取

分析試料は調査区東壁において10層9試料、南壁東隅において7層8試料、計17点の分析用土壌試料を採取した。東壁は溝状遺構が掘り込まれているため南壁東隅に重点を置きその試料採取地点の土柱図をFig.43に示した。

分析法

試料の分析はプラント・オパール定量分析法（ガラス・ビーズ法）の定法に拠った。Fig.42に同法のフローを示した。

2　分析結果

東壁は溝状地形で直接水田に関係するかどうか判然としかねる場所であり、一方、南壁は安定した堆積層序を示し、水田の存在した可能性が考えられる状況であった。

分析の結果、予想されたとおり東壁は溝状地形の特徴を、南壁は水田の特徴を示すイネ科植生分布が認められた。ここでは特に問題となる南壁の分析結果をFig.44に図示しておく。

3　考　察

1. 1～5層には2 t／10a・cm程度の乾物籾生産量に対応するイネ機動細胞プラント・オパールが検出された。この量からみて5層までは水田が営まれていたと判断される。
2. 畦畔遺構が検出されなかったのは後代に水田上層が削平されたためと思われる。
3. 6層まではタケ亜科（ササ）が多く、調査区域周辺は低湿地化しておらず、比較的乾燥した土壌条件下にあったものと思われる。
4. 7層にはイネ科植物は全く認められなかった。

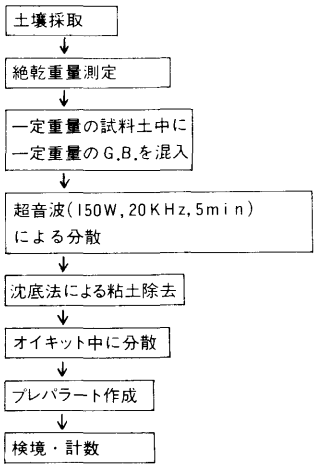


Fig. 42　ガラスビーズ法によるプラント・オパール定量分析ダイアグラム

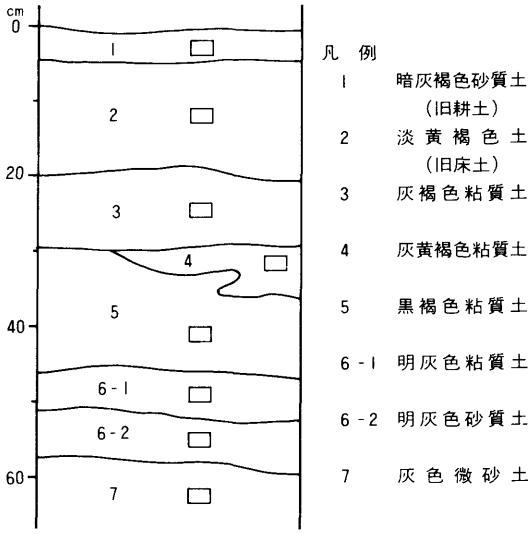


Fig. 43　南壁東隅における
プラント・オパール分析試料採取柱状図

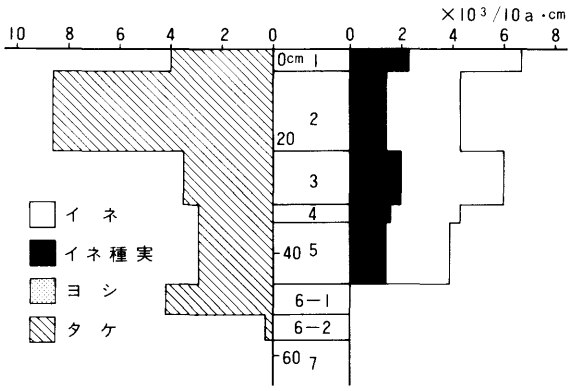


Fig. 44　南壁東隅におけるイネ科植物生産量の推定

2　防長における古代～中世の土器

河　村　　吉　行

近年、防長地域における古代～中世の土器編年は調査例の増加と呼応して秋根遺跡[1]、下右田遺跡[2]等各遺跡単位で試みられているが、実年代を示す良好な共伴資料に恵まれないこともあって編年観に混乱を生じているのが現状である。本稿では秋根遺跡を中心に周辺諸遺跡における共通項を援用し、防長における土師器の時間的先後関係について概括的に述べてみたい。

奈良時代のものは、周防国衙[3]、長門国府[4]、長門国分寺[5]等で散見される。Ｉ－１－ａ段階のものは周防国衙木船2062の２番地（厨屋地区）の溝から出土したものがあげられ土師器坏、皿、椀、甕、高坏が須恵器と伴出している。このうち皿（19）は体部状内彎ぎみに外方へ立ち上がり口縁部を軽く内側に巻き込むもので、伴出する高坏は外面をヘラ削りし内面には少くとも２段に螺旋暗文と放射線暗文が施されている。このタイプは平城宮ＳＤ485[6]の高坏と形態的に類似し、内面螺旋暗文＋放射線暗文＋連弧暗文が一般化する前段階のものと考えられ、皿とともに８世紀前半に位置づけることができる。また、長門国分寺国分寺地区ＬＸ101（ＸＩ$_2$層）出土の高坏はＳＤ1900Ａ[7]に類例がみられ内面暗文もＳＤ1900Ａ出土のものと同一である。Ｉ－１－ｂ段階は長門国府54年度調査の坏(1)で形態的にも平城宮ＳＫ820[9]出土の坏に特徴的な口縁端部をまるく肥厚させ、端部内面に一条の凹線がめぐる程度である。また、内外面とも横ナデ調整を施し、ヘラ磨き、削り等は認められない。従って、ここではＳＢ116との中間形態とし８世紀中頃～後半におくことにする。Ｉ－１－ｃ段階はやや器高が高く、口縁端部をつまみ上げ口唇部外面が凹面になる周防国衙例（２、20）があげられる。これは平城宮ＳＢ116[8]と同一の手法によるもので、８世紀末～９世紀初頭のものと考えられる。

９世紀から13世紀までは秋根遺跡出土遺物により編年を行うことが可能である。秋根遺跡の土師器の編年は平安時代をⅣ１～Ⅳ４、鎌倉・室町時代をⅤ１、２の各様式に分類して編年を行っている[10]が、各様式とも形態、手法、法量、共伴関係により細分が可能で本稿では秋根の各様式を細分することによって各様式相互あるいは一様式内の時間的先後関係[11]について検討してみたい。以下、各段階について述べることにする。

１－２（秋根Ⅳ－１）

底部の切り離しがヘラ切り手法によるもの

Ⅰ－2－a

資料数は少い。

坏は体部の立ち上がりが急角度で直線的に開くもので、口縁部は外反せず端部が尖る。底部と体部の境は明瞭で、底部内面をヘラ削りするものが多い。磨きは認められず、横ナデで仕上げる。胎土精良、焼成良好なものが多い。口径 11.6～12.7 cm、器高 3.9～4.7 cm、底径 7.2～8.0[12] cm前後である。

皿は坏同様体部が直線的に開き、口縁部は尖りぎみに終わる。横ナデ調整。21は口径 13.7 cm、器高 2.5 cm、底径 8.3 cmでO－ XIX ＬD 061出土。

この期の椀は出土していない。

Ⅰ－2－b

坏はQ－XⅦ ＬK 084のものがこれにあたり、Ⅰ－2－a同様ヘラ切り底であるが、体部が内彎ぎみに立ち上がり、口縁部が外反する。器形的には須恵器の坏とほとんどかわりない。Ⅰ－2－aに比べ胎土が粗い。口径 13.2～13.3 cm、器高 4.3～4.7cm、底径6.1～7.0 cm前後。

皿は底部と体部の境が不明瞭で口縁部が外反する。Ⅰ－2－aに比べ法量的変化は小さい。22は口径 14.4 cm、器高 2.4 cm、底径 8.2 cmで O－XIX ＬD 061 出土。坏、皿とも横ナデ仕上げ。

この段階においても椀はみられない。

Ⅱ－1（秋根Ⅳ－2）

この期の最大の特徴は糸切り手法の導入である。

Ⅱ－1－a

坏は器形的にはⅠ－2－cと変わるところはないが口径 13.3～14.6 cm、器高 4.1～4.7 cm、底径 5.4～7.1 cmで口径に比べ底径が小さくなる傾向がある。

皿も器高的にはⅠ－2－cと変わるところがなく、体部は内彎ぎみに開き、口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめている。23は口径 14.1 cm、器高 2.3 cm、底径 7.4 cmとやや小ぶりになる。坏、皿とも横ナデ仕上げ。

椀はみられない。

Ⅱ－1－b

坏は内彎して立ち上がる。体部中位から屈曲して大きく外反する。口縁端部は尖りぎみに終わる。口径 13.1 cm、器高 3.8～3.9 cm、底径 6.4～6.5 cm前後。6は口径 13.1 cm、器

高 3.8 cm、底径 6.5 cm。

皿は体部の内彎度および口縁部の外反度が大きくなる。口縁端部は尖りぎみに終わる。24は口径 14.6 cm、器高 2.3 cm、底径 7.5 cm。

埦はＬＫ 051 のものがこの期にあたるものと思われる。体部中位付近からわずかに外反して開く。40は口径 15.2 cm、器高 5.9 cm、底径 7.4 cm、高台高 1.0 cm。

坏、皿、埦とも横ナデ仕上げ。

Ⅱ－１－c

Ｏ－XX　ＬＫ 034 のものがこれにあたる。

坏は内彎して開く体部に外反する口縁部をもつ。口縁端部は尖りぎみのものと丸く終わるものとがある。口径 12.8 ～ 13.3 cm、器高 3.7 ～ 4.2 cm、底径 6.5 ～ 6.8 cm前後。

皿はⅡ－１－ｂに比べ形態的変化に乏しいが、口縁部が短く外反し、口径、底径とも小さくなる。口径 13 6.～ 14.2 cm、器高 7.1 ～ 7.4 cm、底径 2.1 ～ 2.2 cm前後。

埦は直線的に開く体部に軽く外反する口縁部をもつもので高台は細長く外方へ開く。口径14.4 ～ 15.1 cm、器高 5.1 ～ 5.3 cm、高台径 7.3 ～ 7.8 cm、高台高はいずれも 0.7 cm。

坏、皿、埦とも横ナデ仕上げ。

Ⅱ－１－d

Ｏ－XX　ＬＫ036のものがこれにあたる。

坏はわずかに内彎して開く体部をもつもので、口縁部は外反ぎみに終わるものと体部から直線的に開いて肥厚ぎみないしはそのまま丸く終わるものとがある。口径 13.8～16.0 cm、器高 4.6 ～ 6.0 cm、底径 5.7 ～ 7.0 cm前後で法量にバラツキが認められる。

皿はこの段階で小形のものばかりとなり、口径は 9.4 ～ 9.8 前後とまとまりがみられるが口径に対する器高の高低により、器高 2.6 cm前後で埦の小形化した小皿ａと器高 2.0 cm弱で体部が直線的に大きく開き口縁部の外反する小皿ｂに分化する。27は口径 9 8.cm、器高 1.8 cm、底径 4.6 cm。14は口径 9.4 cm、器高 2.6 cm、底径 4.4 cm。

埦は体部が内彎して開き、口縁部の外反度は大きい。しっかりした高台はⅡ－１－ｂ、ｃ同様外方へ開く。42は口径 15.2 cm、器高 6.4 cm、高台径 7.2 cm。

坏、皿、埦とも横ナデ仕上げ。

Ⅱ－２（秋根Ⅳ－３）

資料数が少い。

坏の体部は大きく内彎して開き、口縁部は軽く外反する。口径に対して器高が低くなる。

9は口径15.2㎝、器高4.8㎝、底径6.2㎝。

小Ⅲaは Ⅱ－1－dの系譜を引くものである。口径9.4～10.1㎝、器高2.4～2.7㎝、底径4.6～5.0㎝前後。小Ⅲb、埦はⅡ－2－a、bに細分されよう。

小Ⅲbは小Ⅲa同様Ⅱ－1－dの系譜を引くもので体部は直線的に開き口縁部は尖りぎみに終わる。29は口径8.2㎝、器高1.6㎝、底径4.2㎝。Q－XⅥ　ＬＧ019出土。31は体部が内彎ぎみに大きく開き、口径に比べ器高が低くなる傾向がある。口径9.2㎝、器高1.5㎝、底径5.6㎝。O－XⅨ　ＬＢ050出土。

この期以降の埦は高台の形状、高さ、口縁部の外反度によって時間的先後関係がとらえられ、下右田遺跡[13]、鋳銭司大歳遺跡14号建物[14]、後出するⅡ－3にみられるように高台の断面形が三角形に近くなるにつれて高台高を減じ、口縁部の外反度が弱くなり、最終的には体部からそのまま開くようになる。したがって高台が低く口縁部がわずかに外反するＬＢ050の44に先行するものとして山口大学構内中央図書館増築予定地溝ＳＤ３のものおよび、堂道遺跡２号井戸出土のもの[15]があげられる。43は口径15.6㎝、器高6.2㎝、底径6.1㎝。44は口径14.8㎝、器高5.2㎝、底径6.5㎝。坏、Ⅲ、埦とも横ナデ仕上げ。

Ⅱ－3（秋根Ⅳ－4）

Ⅱ－3－a

P－XⅧ　ＬＤ105、Q－XⅦ　ＬＧ034のものが該当する。

坏はⅡ－2に比べ体部の内彎度が小さくなり器高も低くなる。また、口縁部は外反せず体部からそのまま開くようになる。口径13.4～14.2㎝、器高3.9～4.1㎝、底径6.1～7.0㎝前後のものが多い。

Ⅲは、ほとんど小Ⅲbのみとなり底部と体部の境が不明瞭となる。体部は直線的に開くものと内彎しながら開くものとがある。口径7.9～9.0㎝、器高1.2～2.1㎝前後でⅡ－2に比べ口径が小さくなる。

埦は高台が退化し断面三角形となり、口縁部の外反は目立たないほどになる。口径15.0～15.9㎝、器高5.2～6.0㎝、底径5.1～7.3㎝前後。

坏、Ⅲ、埦とも横ナデ調整。

Ⅱ－3－b

坏はⅡ－3－aに比べ体部が直線に近く開くP－XⅥ　ＬＫ045のものがこれにあたる。11は口径14.1㎝、器高4.0㎝、底径7.2㎝。横ナデ仕上げ。

埦、ⅢはⅡ－3－aとⅡ－4－bの間に入るものとして、Ⅱ－3－aに比べ高台の退化

した底径の小さいものがこの期にあたると思われるが確認していない。

Ⅱ－4－b（秋根Ⅴ－1）

M－XⅦ　LW002出土のものがこれにあたる。

坏は口径、器高ともに減じ小形化する。底部と体部の境が不明瞭となり、体部は内彎ぎみに開くがほぼ直線的で口縁端部は尖るものが多い。12は口径11.4㎝、器高3.3㎝、底径7.7㎝。

皿は口径7.3㎝、器高1.5㎝前後で形態的には変化に乏しいが、器高を減じ、底部周縁をつまみ上げただけのものが出現する。

埦はⅡ－3－aに比べ高台のさらに退化した高台径の小さいものがこの期に入るであろうが確認していない。

坏、皿とも横ナデ仕上げ。

Ⅱ－4－c

鋳銭司大歳遺跡14号建物[16]出土のものがこの段階にあたる。

坏は薄手で体部が直線的に開くようになり口径に対して底径が小さくなる。口径11.4㎝、器高3.5～3.9㎝、底径5.0㎝前後で器高指数34[17]前後である。

皿はいずれも底部の周縁を直線的ないしは内彎ぎみにつまみあげただけのもので、口径6.9～7.1、器高0.9～0.7㎝、底径6.1～6.4㎝と法量的に小さくなり作りも粗雑になる。

埦は極めて退化した高台をもつもので、体部は内彎して開く。46は口径15.5㎝、器高5.7㎝、底径4.4㎝、

坏、皿、埦とも横ナデ仕上げ。

Ⅱ－5

坏は薄手のもので堂道遺跡C地区包含層[18]および大内氏館跡53年度調査1号土壙[19]のものがこの時期にあたる。口径11.5～14.0㎝、器高2.5～3.2㎝、底径5.0～6.5㎝前後で器高指数22～24。体部がほぼ直線的に開くものと、やや内彎ぎみに開くものとがあるが現段階では時期差か形態差か、にわかに決定しがたい。口縁部は尖りぎみに終わるものが多い。

皿は大内氏館跡13号土壙[20]のもの。口径7.3㎝、器高1.0～2.0㎝、底径4.0～5.0㎝前後の薄手のもので、口径に比べ器高が高い。

坏、皿ともナデ調整で粗雑。

Ⅱ－6

玉祖遺跡Ⅰ地区5号墓[21]、朝田墳墓群第Ⅲ地区69号墓[22]、吉田岡畠遺跡[23] pit.199、大内氏館跡10号土壙[24]、黒川遺跡[25]等でみられる。

坏は薄手で体部中位から屈曲し外方へ開くもの（Ⅰ類）と体部からそのまま直線的に開くもの（Ⅱ類）とがある。いずれも調整は横ナデで粗雑。

Ⅰ類は口径11cm以下10cm前後、器高2.0cm、底径5.0cm前後。Ⅱ類は口径12cm、器高2.5cm、底径5.6cm前後である。また大内氏館跡では厚手で口径10cm以下、器高2.0cm内外のもの（Ⅲ類）が認められる。

Ⅰ～Ⅲ類とも器高指数は20以下である。

皿は良好な資料がないが形態変化が少く、Ⅴ－2に比べ口径の小さくなる黒川遺跡5号墓の例を上げることができる。39は口径6.3cm、器高1.8cm、底径3.9cm。

Ⅱ－7

朝倉河内古墳群の1号墳墳丘裾より検出された第1号集石遺構[26]、黒川遺跡土葬墓[27]および勝栄寺遺跡[28]から出土した坏が該当する。

坏は薄手で体部が直線に開くものと口縁部付近で屈曲して外方へ開くものとがあるが、直線的に開くものの方が多い。口径11.4～12.2cm、器高2.4～2.7cm、底径3.6～5.2cm、器高指数20前後のものの他に小型のものがある。

以上、述べてきたように9世紀以降秋根遺跡を中心としてⅠ－2～Ⅱ－7の各段階の分類が可能であることが明らかとなった。以下、各様式の実年代について考えてみたい。

Ⅰ－2－aの段階にあたるLK081からは須恵器、蓋坏が伴出している。坏蓋は扁平な天井部に凝宝珠形の撮みをもち、口縁部の断面が鳥嘴状に三角形になるものである。
また坏身は高台がつかず、体部が直線的に立ち上がるもので底径指数0.52を測る。これらは百谷1号窯跡[29][30]、末原5号窯跡[31]で類品がみられ両窯跡では底部と体部との境に垂直かあるいはやや外反ぎみの高台を貼付し、底部と体部の境が認められない高台付坏を伴出している。このタイプの高台付坏は太宰府学校院井戸埋土層出土のものと酷似し、亀井明徳氏は9世紀代に比定されている[32]が、百谷、末原両遺跡では環状撮みをもつもの、あるいは撮みをもたないものと共存しており、9世紀前半から中頃に比定されうるものである[33]。したがってLK081出土須恵器、土師器も同時期の所産として取扱うことができる。

また、Ⅱ－1－aの坏5は北方遺跡8号溝第2層例[34]より口径は小さいが器形は同一で糸切り底である。調査者はこの型式を「10世紀の早い時期[35]」と考えておられ、この段階をヘラ切り底から糸切り底への転換期としている。

秋根遺跡Ⅱ－１－ａの坏は、その他で良好な共伴資料が得られず時期決定に苦慮するが本稿では北方遺跡例にならい一応10世紀初頭におくことにする。したがってⅠ－２－ｂは９世紀中頃～後半に位置づけることができる。しかし、Ⅰ－２－b、Ⅱ－１－aとも形態的な変化に乏しく、口縁部の形態および底部切り離し手法の相違を指摘できるだけであり、ヘラ切りおよび糸切りの両底部切り離し手法は、しばらくの間共存していたものと思われることから、Ⅰ－２－ｂは10世紀初頭に下る可能性がある。

Ⅱ－１－ｂの坏（８）は現段階ではⅡ－１－ｃからの系譜関係を捉えることが困難であるが、周防国衙南限地域Ｄ地区（西南隅部）の調査では第６トレンチ西端部から体部が大きく内彎しながら開く椀および乾元大宝、八稜鏡と共伴することから上限を10世紀後半、下限は後述するⅡ－２との関係から10世紀終末に比定することができよう。したがってⅡ－１－ｂおよびｃはⅡ－１－ａおよびｄの中間型式として前者を10世紀初頭～中頃、後者を10世紀中頃～後半におくことにする。

Ⅱ－２は、秋根遺跡に限らず県内では資料数が多いとはいえない。椀および小皿ａについては下限の決定資料がないが30が坏９と共伴することおよびＬＤ105出土の椀と共伴する坏10が12世紀前半頃と考えられることから11世紀代には比定されよう。また、坏は一型式をもって11世紀を代表させるには時期的幅がありすぎ、今後細分が必要であろう。小皿ｂ 29は断面三角形の小さな高台をもち、内彎して開く体部に続く口縁部の内面に一条の沈線をめぐらす黒色土器Ａ類を共伴している。このタイプの黒色土器は、併出する須恵器から樽崎彰一氏の編年では10世紀後半に比定される京都市深草仁明稜北方遺跡火葬墓例[37)38)39)40)]と11世紀前半から末葉と考えられている成立段階の瓦器椀を伴う法隆寺東室出土例[41)]との間に位置するもので11世紀の前半でも比較的早い時期におくことができよう。

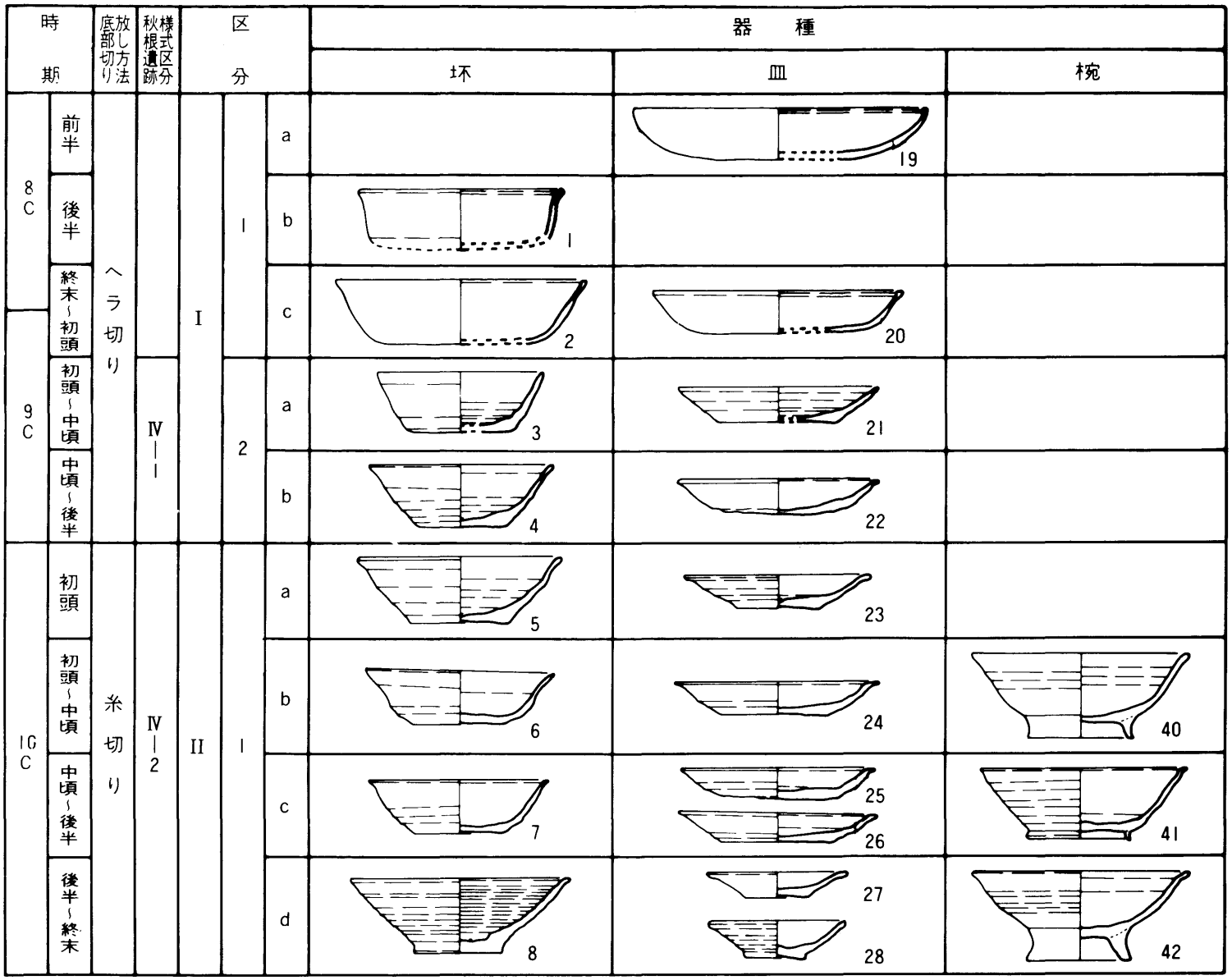
Ⅱ－３－ｂの坏11は瓦器椀を伴出している。この瓦器椀は体部が屈曲することなく内彎して立ち上がり高台は断面三角形を呈する。胎土は比較的精良であるが、内外面とも粗いヘラ磨きを施し、口径 16.2 cm、器高 5.6 cm、器高指数 34.5 である。このタイプの瓦器椀は白石太一郎氏の編年[42)]では第Ⅱ段階の後半に位置づけられ、12世紀後半の年代が与えられている。また森田勉氏による第Ⅲ型式[43)]の範疇に入るものと思われ、氏は12世紀後半～13世紀初頭に比定されている。従ってⅡ－３－ｂは時期幅をとり12世紀後半～13世紀初頭に比定されうる。鋳銭司大歳遺跡２号墓[44)]からはこの期の椀とともに横田賢次郎、森田勉氏らの分類でいう白磁Ⅴ－４－ａ[45)]が出土しており矛盾しない。従ってⅡ－３－ａは12世紀前半頃、Ⅱ－２－ｂは11世紀後半頃におくことができよう。

Ⅱ－4－bは神道寺・天疫神社前遺跡5号土壙[46]に類似の資料が認められる。この遺跡から出土する瓦器椀はⅠ・Ⅱ類に区分され、長野D遺跡[47]の瓦器椀との形態、法量およびヘラ磨きの有無等の手法の差異により時間的先後関係がとらえられるとし、Ⅰ類を13世紀後半、Ⅱ類を13世紀中頃に比定している。5号土壙からは瓦器椀Ⅱ類のみが出土し、伴出する坏は体部が直線的に開くものと内彎ぎみに開くものが認められ、口径11.5～13.5㎝、器高2.9～3.7㎝、底径6.0～8.5㎝を測り、口径12.5㎝、器高3.4㎝、底径6.9㎝前後のものが多いとされている。Ⅱ－4－bの坏は調整、器形、法量とも共通する要素が多く13世紀中頃に比定されよう。

Ⅱ－4－cの坏は力丸遺跡[48]および鋳銭司大歳遺跡に類品をみることができる。栗山伸司氏は力丸例を中国銭、青磁を共伴し13世紀後半をさかのぼらない辻田西遺跡[49]を上限とし、辻田西遺跡よりやや後出する椎木山遺跡[50]例との間に位置づけ少なくとも13世紀後半から14世紀前半の時期を与えている[51]。また、鋳銭司大歳遺跡14号建物跡からは口径11.4㎝、器高3.9㎝、底径5.0㎝と力丸例に比べわずかに器高が高いが、調整、器形等変わるところのない坏が皿および前述したような体部が内彎して開き、高台の極めて退化した椀と伴出している。北九州市域では13世紀中頃に比定される神道寺・天疫神社前遺跡2号土壙における椀が鋳銭司大歳遺跡例と共通する要素が多く、この期の椀が急激に減少することから13世紀代に消滅する可能性が高いとされている。以上のことからⅡ－4－cは13世紀中頃から13世紀後半、下っても14世紀の早い時期までの可能性が高いものと思われる。

なお、鋳銭司大歳遺跡14号建物跡からは、この坏とは別に体部が内彎し、立ち上がりの急傾斜な口径13.7～15.5㎝、器高5.3～6.2㎝、底径4.8～6.8㎝を測る大形坏の一群がある。14世紀の資料は年代決定の決め手を欠くきらいがあるが、北九州市域では13世紀後半以降、口径に比べ器高が低くなり、底径が小さくなる傾向が認められており、器高指数が30～34であるⅡ－4－cに比べ器高指数22～24である堂道遺跡C地区包含層例および大内氏館跡1号土壙例をあてることができる。15世紀の資料は玉祖遺跡Ⅰ地区5号墓、朝田墳墓群第Ⅲ地区69号墓、大内氏館跡54年度調査10号土壙で永楽通宝を伴出した例が知られており、上限を15世紀前半におくことができる。口径に比べ器高はさらに小さくなり、器高指数は20以下となる。大内氏館跡の調査では、器壁の薄いものが厚手のものに先行する事実が認められており、大内氏館跡54年度調査10号土壙例は時期的に下る可能性がある。

Ⅱ－7の資料は、年代決定の決め手が少なくわずかに朝倉河内例があげられるにすぎない。出土した坏は蔵骨器・五輪塔を伴出するが時期幅があり、蔵骨器（Ⅲ）を上限として16世紀代に比定されるものである。



1	長門国分寺跡 54年度調査LW006	15.38	吉田岡畠遺跡 pH199	37	大内氏館跡 54年度調査13号土壙
14	堂道遺跡C地区包含層	18	朝倉河内古墳群第1集石遺構	その他	秋根遺跡
17	大内氏館跡 54年度調査10号土壙	43	堂道遺跡2号井戸		
39	黒川遺跡5号墓	13.35.36.46	鋳銭司大歳遺跡14号墓		
2.19.20	周防国衛跡厨屋地区東西溝	16	朝田墳墓群第 地区69号墓		(各報告書より転載、一部加筆)

Fig.45－(1) 防長における土師器編年図（試案） 縮尺 1/4

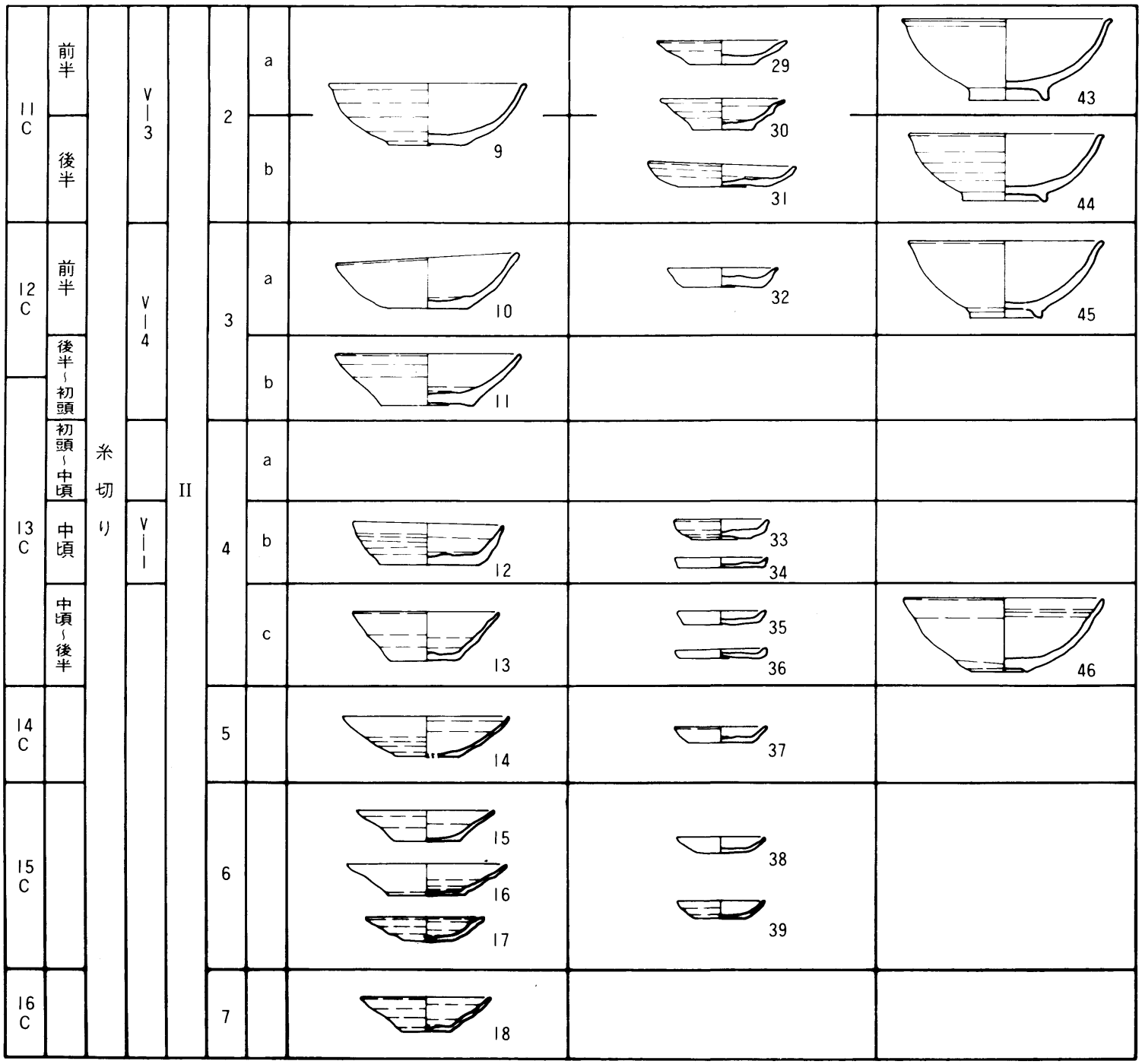


Fig. 45－(2)　防長における土師器編年図（試案）　縮尺 ¼

注）

1) 下関市教育委員会　「秋根遺跡」　1977

2) 山口県教育委員会編　「下右田遺跡第４次調査概報・総括」　山口県埋蔵文化財調査報告第53集　1980

3) 防府市教育委員会　「周防の国衙」　1967

4) 下関市教育委員会　「長門国府」　長門国府周辺遺跡調査報告Ⅲ　1979

5) 同　上　「長門国分寺」　長門国府周辺遺跡発掘調査報告Ⅴ　1982

6) 奈良国立文化財研究所　「平城宮発掘調査報告Ⅵ」　奈良国立文化財研究所学報第23冊　1974

7) 同　上　「平城宮発掘調査報告Ⅸ」　奈良国立文化財研究所学報第34冊　1978

8) 同　上　「平城宮発掘調査報告Ⅱ」　奈良国立文化財研究所学報第15冊　1962

9) 同　上　「平城宮発掘調査報告Ⅶ」　奈良国立文化財研究所学報第26冊　1976

10) 秋根遺跡において設定された一様式中の各器種はひとつの様式内で明らかに同時期性を内在するが、この様式がいかなる一定地域を包括するものか今後の資料の増加を待って検討されるべきことは言うまでもない。しかし、資料数の不足が歪めない現段階では秋根遺跡の各様式をもって一定の空間的、時間的まとまりをもつ一群と理解する。

11) 編年表における一様式内の特定器種における上下関係は時間的先後関係は示さない。

12) 法量は秋根遺跡に限らず量的には多くはない一遺跡中、一様式中の一器種について法量化したもので、各様式中の特定器種についての法量の絶対性を占るものではない。

13) 山口県教育委員会編　「下右田遺跡第３次調査概報」　山口県埋蔵文化財調査報告第46集　1977

14) 同　上　「上辻・鋳銭司大歳・今宿西」　山口県埋蔵文化財調査報告第75集　1984

15) 山口県教育委員会　「堂道・五反田遺跡」　山口県埋蔵文化財調査報告第22集　1973

16) 前掲書　14)

17) 器高の底径に対する比率。底径指数＝ $\frac{器高}{口径} \times 100$

18) 前掲書　15)

19) 山口市教育委員会　「大内氏館跡Ⅰ」　山口市埋蔵文化財調査報告第９集　1981

20) 同　上　「大内氏館跡Ⅱ」　山口市埋蔵文化財調査報告第10集　1980

21) 山口県教育委員会　「玉祖神社・西小路遺跡」　山口県埋蔵文化財調査報告第70集　1980

22) 同　上　「朝田墳墓群Ⅱ、鴻ノ峰１号墳」　山口県埋蔵文化財調査報告第33集　1977

23) 同　上　「吉田岡畠・吉田大浴・下長野遺跡」　山口県埋蔵文化財調査報告第23集　1973

24) 前掲書　20)

25) 山口県教育委員会　「くろかわ」　山口県埋蔵文化財調査報告第57集　1980

26) 朝倉河内古墳群発掘調査委員会編　「朝倉河内古墳群調査報告書」　山口市埋蔵文化財調査報告第４集　1975

27) 前掲書　25)

28) 新南陽市教育委員会　「勝栄寺」　新南陽市埋蔵文化財調査報告第１集　1983

29) 渡辺亨　「百合窯跡」『小郡町史』　小郡町　1979
30) 桑原邦彦・池田善文　「防長地域の須恵器窯跡と編年研究」『山口県の土師器・須恵器』周陽考古学研究所　1981
31) 末永博憲・小田村宏　「末原窯跡」　山口県教育委員会　1980
32) 亀井明徳・酒井仁夫・高橋章　「向佐野・長浦窯跡の調査」『九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告　Ⅳ』　福岡県教育委員会　1975
33) 前掲書　30)
34) 谷口俊治・上村佳典・栗山伸司・梅崎恵司　「北方遺跡」『発掘ニュース』№21　北九州市教育文化事業団　1982
35) 谷口俊治・上村佳典　「砥石山遺跡」　北九州市埋蔵文化財調査報告書第28集　1984
36) 防府市教育委員会　「周防国府―南限地域―の調査」　1975
37) 酒詰仲男他　「京都市伏見区深草仁明陵北側地点発掘経過略報」　日本考古学協会第25回総合研究発表要旨　1960
38) 樽崎彰一　「土器の発達―須恵器」『世界考古学大系』Ⅳ　平凡社　1976
39) 白石太一郎　「いわゆる瓦器に関する二、三の問題」『古代学研究』54　1969
40)　同　上　　「瓦器の生産に関する二、三の覚え書」『古代文化』27巻1号　1975
41) 『重要文化財法隆寺東室修理工事報告書』　1961
42) 前掲書　39)、40)
43) 森田勉　「九州地方の瓦器椀について　―型式分類と編年試案―」『考古学雑誌』第59巻2号　1973
44) 前掲書　14)
45) 横田賢次郎・森田勉　「太宰府出土の中国輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4　1978
46) 木太久守・小方泰宏・藤丸詔八郎　「神道寺・天疫神社前遺跡」　北九州埋蔵文化財調査報告第11集　㈶北九州市教育文化事業団　1982
47) 木太久守・山手誠治　「長野D遺跡」　北九州市埋蔵文化財調査報告第5集　㈶北九州市教育文化事業団　1980
48) 中村修身・山手誠治　「力丸遺跡」　北九州市埋蔵文化財調査報告第26集　北九州市教育委員会　1978
49) 山手誠治・梅崎恵司・佐藤浩司・宇野慎敏・栗山伸司　「辻田西遺跡」　「北九州市埋蔵文化財調査報告第13集　㈶北九州市教育文化事業団　1982
50) 木太久守・山手誠治　「椎木山遺跡」　北九州市埋蔵文化財調査報告第24集　北九州市教育委員会　1977
51) 宇野慎敏・栗山伸司　「徳力遺跡第二地点」　北九州市埋蔵文化財調査報告第30集　㈶北九州市教育文化事業団　1984